

Norbert Herold: *Menschliche Perspektive und Wahrheit.
Zur Deutung der Subjektivität in den philosophischen
Schriften des Nikolaus von Kues*

Buchreihe der Cusanus-Gesellschaft, Bd. VI,
Münster, Aschendorff, 1975.

八 卷 和 彦

表題からもわかるように著者は、現代のクザヌス研究の二つの方向、即ち彼の絶対者の問題への努力をきわ立たせようとする立場と、彼における有限者に関する思考の出発をきわ立たせる立場との結合を意図した上で、次のように課題を設定する。「真理、絶対者、無限者に関しては、有限者と結合することにおいてのみ、即ち有限な視界からのみ語られうるのであり、さらにこの思想をきわ立たせることにおいてクザヌス哲学の本質的関心事が理解される。」先ず Einleitung において近代的 Subjekt 概念の特徴として次の二点をあげる。第一に、それには肉体的実存の肉体的 Perspektive からのみ事物が認識されるという制約が課せられており、第二に、しかしこの制約が認識されるならば以前の立脚点の制約を明らかにするもう一つの新たな立脚点を選択する能力を、それは有している。各々の立脚点は既に自己の限界超越を含んでいるので、常に既に運動として存在していることになり、この意味での Subjekt は、もはや substatielles Etwas ではなく、Walter Schulz の規定に従って ein ichhaft sich vollziehendes Tätigsein であるとされる。

次に、従来の解釈者のようにクザヌス哲学の本質を不適当に性急に近代化することなく、その本質の特徴の内に上述の Subjekt 概念とそれを支える思考の方向転換の存在を明らかにするべく、著者は独自の方法としてクザヌス哲学における諸諸の形象と思考形に考察の焦点をあてる。そしてここから次の四つの思考モデルを導出する。1. 基礎として存在し、空間へ広がりつつある精神の統一性についての点の形象。2. 精神の限界設定と限界超越運動の表象。3. 人間の思考の自発性と固有の被制約性への反省とに関する表現としての「生きた鏡」の形象。4. 有限な視と無限

な真理との結合における *Perspektivität* の思想。著者は以上のように本書の目的と方法を設定した上で五章に分けて考察している。

第Ⅰ章, *Die Bedeutung der docta ignorantia für das Welt- und Selbstverständnis* では, *docta ignorantia* における *perspektivisch* な要素の存在が考察される。*docta ignorantia* はあらゆる人間の認識の原理的不確実性を明らかにしている, とするクザヌスの把握は, 理性的方法によって神とその *Substanz* において出会う可能性を(少なくとも根本では)確保しているスコラの把握とは区別される, と著者は指摘しながら思考の方向転換の成立を示そうとする。他方でクザヌスは有限者と無限者との関係を保証する場としても *docta ignorantia* を考えているのであり, そこで成立する *coincidentia oppositorum* は, その下でわれわれが絶対者を視ることが可能となる *Perspektive* である, と解釈する。次に著者は被造存在の被制約性を示す概念 *contractio* を, 神, 世界, 個物の関係を説明するためのものであり, 一定の視界の下で無限なものを限界づけること, 否定することであるゆえに, これは *perspektivische Einheitsbeziehung* として解釈できるとする。また有機体的宇宙において被造的領域を特徴づける運動は, それを超える原理としての超運動・神を指示しているとみる。さらに神の *complicatio* と *explicatio* という在り方が「無限な点」と形象されていることから, 神の精神の似象としての人間の精神の立脚点の特徴をもみてとることができる, と解釈する。またクザヌスにおける地球と人間との伝統的特権の喪失は, 人間の精神の自己反省と自己超越および無限なものへの志向能力とにおいて回復され, そこに人間の新たな定位点がおかれている, とみている。

かくしてクザヌスは無限問題の考察によって *perspektivisch* な思考法をきわ立たせ, そこで人間の固有の *Subjektivität* を洞察している, と著者は総括する。

次に第Ⅱ章, *Die menschlichen Erkenntnisse als „coniecturae“* において, 人間の認識における積極性を明らかにしようとする。*coniectura* は, 存在するとおりの真理を他性において(即ち縮限した形で)分有している積極的陳述であり, 従って人間は *humanus Deus* あるいは *humanus mundus* として自身の能力を展開しながら自己認識へ到達する。ここに精神の新たな立脚点に移される上昇運動があり, それゆえに *perspektivisch* な性格をみることができると著者は言う。あらゆる認識に(縮限された形ではあるが)真理総体が包含されていることは, 実は個々の *coniec-*

tura によって措定されている限界が常に既に超越されていることを意味する。

このような限界と限界超越とは正しく *perspektivisch* と称することのできる思考方法の特徴である。この *perspektivisch* な方法においては、その際に見える世界の一面のみならず観察者の立脚点も重要なものとなり、ここから Ich と外界, Subjekt と Objekt との関係が新たな意味をもってくる、と著者は考察する。

第三章, *Der menschliche Geist als Grenze und Maß aller Dinge* においては、上述の認識の関係点としての Ich と, Ich との関係によってはじめて現象に入ってくる対象との関係が検討される。クザーヌスは普遍について、比較することによって作り出す普遍的なものどもは、諸事物の内に縮限されている普遍的なものどもの類似である、として二種の普遍を考えている。この点から著者は、自然的事物に向かう似像の進行過程と、知性が自身の内に包括している普遍概念を提示する展開運動という二重の認識運動を抽出する。また *De mente* における対象の命名の問題を考察することから、クザーヌスにおいてイデア論が補助的構造とされており、形相は弁証法的運動の中で解消されている、と解釈する。さらにこの点から、クザーヌスの思考が事物への関係と創造者への関係という二つの視界へと分極化している、ともみなす。また精神が感覚による刺激を必要とするというクザーヌスの理解は、彼が外界の積極的意味と精神の優越的判断力の両者に固執していることを示すが、結局それらは二分裂している、と著者はみなす。そこで上掲のいくつかの二重性、二極性を統一するための前提と保証として、著者は、人間が自己の似像性を洞察していることをあげている。

第四章, *Der Geist als Abbild der göttlichen Einfachheit* は、神との関係に重点をおいて考察されている。人間は精神的世界の運動しつつある中心であるゆえに、単なる神の展開ではなく似像である。従って精神も包括的一性と理解され、ゆえにそれは *quasi unus punctus* である。またそれは *Lebendigkeit* を有するので、自発的で点的な知性能力の表現としての概念形成能力を示す。著者はこのような精神を、自己固有の大きさをもたずに自由に他者を測定しうる一種の絶対的尺度とする。

また似像としての人間の精神は、自己運動能力により認識のための多様な立脚点をその都度選びながら、それらを統一しなければならない。従って精神は、個々の *Perspektive* の被制約性を克服できる点まで自ら移動する必要がある。これが上述

の上昇と下降の二重の認識運動において生起しているのである。このような人間の精神の二重の方向性の中に、著者は *Subjektivität* が構成されると言う。

第V章、*Der Geist als lebendiger Spiegel* においては、前章で摘出された人間の *Subjektivität* に焦点があてられる。著者は、クザーヌスにおいて人間の精神が真理との関係から *lebendiger Spiegel* と規定されていることに注目する。*Lebendigkeit* とは先にみた如く自己運動能力であるから、精神は立脚点を自分で選び、鏡としての自己を変形させたり、浄めたり、自己内に映っている世界像を投げ返したり、さらに鏡としての自己を反射（反省）する *reflektieren* ために自己から離れることも可能である。ここに著者は、精神の自由と主体性が現われている、とみなす。著者は、クザーヌスにおける人間の *perspektivische Situation* において、その被限定性を超越すべきことが示されており、さらに無限な真理は全ての個別的な *Perspektive* の背景および地平として推論される、とする。かくして著者は次のようにしめくくる。世界は人間の *Subjektivität* との関係によってはじめて神の啓示かつしるしとしての意味を得る。何故なら、人間の *Subjektivität* は思惟の生きた運動において被造物との連関および無限なものの地平を開示するからである。逆に、世界認識および行為における精神の展開は、同時に人間という *Subjekt* の自己確証と自己実現である。人間という *Subjekt* は、それ自身の限界に向かってたえず新たに遂行される自由な移行の運動と歴史として把握される。またそれは、自己の立脚点と無限な世界、創造連関との統一についてたえず新たに解明する生きた力として把握される。

以上の概観からわかるように、著者はクザーヌスに即してクザーヌス哲学の近代性を浮彫りにしようとしている。彼の思想における語彙だけでなく諸々の形象および思考形に着目し、それを吟味して解釈を進める方法は、著者も言うようにクザーヌスの思惟のあり方にも相即しており、興味深いものである。また課題の論証においても、著者が設定した限りにおいては綿密にまた手際よく展開されている。

しかし、さらに深く踏みこんで「クザーヌスに即して」考えてみると、一二の問題点が指摘されうる。先ず方法的な面であるが、著者は形象と思考形を追跡するあまり、*De docta ignorantia* および *De coniecturis* から *De mente* さらに *Compendium* までを、著作年代の相違を考慮することなく論証に使用している。この点について著者は、「精神が無限なものへ上昇すれば思考の相違は解消する」とクザー

ヌス自身が述べていることを引用して、個々の著作の間の相違は絶対化されるべきでない、と断わっている。確かにそれは絶対化されるべきではないが、この著書のように哲学的課題を担っている場合にそれを無視することは、いさかか当をえていないのではなかろうか。

次に課題の設定に関してであるが、クザーヌスの *Subjektivität* を単に *Perspektive* との関係にのみ位置づける事には問題があると思われる。著者は *Perspektive* に注目することにより、結局 *Subjektivität* を認識論的枠組みの中でのみ考察しており、*Tätigsein* であることを見落しているようにみえる。しかし著者も言及している如く、クザーヌスにおいては存在論的かつ認識論的な問題設定と思惟とがなされているのであり、「知解はその働きにかんするかぎり、存在と生命の後にくる」(*Doct. ign.* II, 6, h. 81) とも言明されている。従って評者は、クザーヌスの *Subjektivität* は単に認識論的に局限された場で考察されるべきではなく、存在と生命をも含む場において考察されるべきだと考える。*menschliche Subjektivität* の真の理解は、神の *absolute Subjektivität* を原像とする似像、「縮限的主体性」と把える(評者は『ニコラウス・クザーヌスの *Theophania* と *Deificatio*』なる小論でその端緒を試みたことがある。『和歌山大学教育学部紀要』1977。) ことによって、十全なものとして成立しうるのではなかろうか。(この点に関して、著者が *Perspektive* から *Subjektivität* を導出することは逆であり、後者から前者が証明されるのである、とする Fräntzki の指摘は当を得ていよう。*MFCG* 12, S. 172, 1977). そして評者は Fräntzki とも異なり、*menschliche Subjektivität* は <似像-原像論>の成立する場としての <信仰>との関係から説明されるべきであろうと考えている。(この点に関して坂本堯氏の指摘がある。*Die theologische und anthropologische Fundierung der Ethik bei Nikolaus von Kues*, *MFCG* 10, 1973.) この問題についての立入った説明は稿を改めて試みたいと思う。